

22 【ちひる】

夏休みの楽しみといえ、何よりも筏（いかだ）下りでした。完ちゃんと粗末（そまつ）な筏を作って、中川を下るのです。先生から将来何になりたいかと聞かれると、きまってぼくは、「ふなのり」

と答えました。

完ちゃんは、

「せんちょう」

と答えました。

だから、完ちゃんを船長にして下る。

完ちゃんとぼくは、調子に乗ってさけぶ。

よー

ほっほっほー

よー

ほっほっほー

途中で筏がこわれそうになると、いったん川岸にあがって直しました。

「こいつにのって、どこいこうかのう」

ぼくがきくと、きまって完ちゃんは、

「たからじまじゃ」

と答えたものです。

ぼくも同じ気持ちだったけれども、

「おばけのくにじゃ」

ときけんだものです。

完ちゃんが目を丸くしました。

筏の修理（しゅうり）が終わって、また乗り込もうとすると、完ちゃんの足が、血まみれになっています。

蛭（ひる）にやられたんだらうとおもって、完ちゃんの足をこすってみると、蛭はいない。

一応手拭いで足を縛ったけれども、完ちゃんの血は止まらない。

何だか気味が悪くなって、今回の筏下りはそこでおしまい。

筏を中川の流に捨てて、上流に向かって歩きました。

とうぜん懐爺のところに寄りました。

完ちゃんは出血多量で、顔色が悪くなって、

「しぬ、しぬ」

と口走っています。

ふだんの元気な完ちゃんとは、まったくちがう。

ぼくもいっしょになって、

「しぬ、しぬ」

とわめきます。

「いそいで、なんとかせいや」

と懐爺をせかせました。

「どれどれ、ほいほい」

と、懐爺は完ちゃんの足をさわります。

そしてすぐに診断しました。

「これは【ちひる】にやられたんですね」

「ひるじゃねえんか」

完ちゃんが、蒼白い顔でいいました。

「蛭は蛭でも、【ちひる】は蛭のおぼけですから、姿形がみえない」

「まいったのう」

ぼくがいいました。

「まいる必要はありません。いま血止めの草を探しますから」

懐爺は草を探したりはしない。

目の前にある雑草を引き抜いて、掌の中でこすって、草の汁を完ちゃんの足にぬります。

するとすぐに血が止まったのです。

完ちゃんは元気になって、

「よくきくのう」

感心していいました。

「このくさは、【ちひる】いがいにもきくんか」

完ちゃんがきくと、

「この薬草は、【ちひる】専用のものです」

懐爺は、そっけなくいました。

ぼくには、薬草とはおもえない。

懐爺が、おまじないをしたのだとおもいました。

「ついでですが、ひるはひるでも、中川には、【ひるぶね】というおぼけがでますから、ご用心」

懐爺がついでをいうときは、機嫌のいい証拠なので、ぼくはせがんだのです。

「【ひるぶね】のはなし、ききたいのう」

懐爺は、さらに上機嫌になりました。

「【ひるぶね】はお昼にでる舟で、血を吸う蛭ではありません。筏ならいいですけど、この【ひるぶね】に乗ったら、さあ大変です」

「どうたいへんなんじゃ」

明るいうちにでるおぼけは、怖くはない。

そう前に教えてくれたのは、懐爺のはずです。

「同乗者と必ず賭け事をやる羽目になってしまって、無一文にさせられるんです。身ぐるみはがれる場合もあります」

「どうじょうしゃとやらも、おぼけなんか」

「その舟と同乗者をまとめて、【ひるぶね】というおぼけなんですよ」

「ややこしいのう」

「ともかく中川で、【ひるぶね】に乗ってはいけませんよ」

懐爺は、完ちゃんとぼくの顔を、かわるがわるみていました。

完ちゃんとぼくは、お互い顔を見合って、口々にこういいました。

「わしらは、もんだいないのう」

「はじめから、むいちもんだからのう」

「わしらは、こわくはないのう」

「はじめから、みぐるみはがれているからのう」

「わしらは、かんけいないのう」

「はじめから、いかだしかあたまにないからのう」

懐爺の機嫌が悪くなったのは、いうまでもありません。